拾遺聖典

二

へ 5
1217
2

5
1217
(2)

早稲田大学図書

英流

太田經文切一枚

今やこれの春海門ふるうて汐せゝ
ぬりの梅と咲くしのゝ小島の春逢
と歩よきゝ

乙ふ龍く春とや月の柳とも　經格

ぬるむ流れの清いく旅　更化

新秋の鶯を祝ひのこゑ　柳角

文の家くるすゝきなりけり　亡渓

明りとなるこゝの月明り　赤曉

第六番ちる桜五枚冊誠　梅史

葉ゝ葉てゝるの人ひと紅とさも　里雪

京の夜も更皆ハ月ゆゑ　芦邨

ちるくとさゝやくもみちを　里作

流るゝ笛ハ源氏女房　岡校

弾く琴も紅葉ふもとの相夫恋　志風

蔦ち時ゝ　再ゝ生　源　子

公源

れ雪や降てとまりの〳〵ちる　星校

西山ん寺ゝ鳥ゝ柳ゝ　里作

ゆ〻ゝ鳴ゝ　志風

松柳戸ゝ花ゝ実ゝ書ゝ　芦邨

ま也ゝ月ゝ和ゝく夢ゝ　里雪

ちゝれ雲の切ゝ雪ゝ　志峡

月ゝて心の梅鳴ゝ　梅史

実ゝり此姫ゝの連ゝ　林角

清て敵の手をもむうの基　六濱
ゆゑ男の時う清て敵の基　鄭怡

尊と宗雄なり一折

及ぶ能やこるうを敵もに成時　可蔵
時と敵うとかゝしの出る基　東左
遠の敵と敵る黄の第の時て　鄭怡
市てもんうを戻をもの市うり　長宝
破破ふて敵うにくりの新法敵　一矣

濟と角力のこゝの手後　石之
敵うの今も京良ハ中し　都多
曙清の　京方
京市敵の　敵二
京の敵の行も打かれ　二の矣
遠ふて敵るこゝの西ぶし　二柳
曙京て毛鍾ふ曙る京北か　巳北
京の七京　八京ふ　寿ふ　京

むさしの
人こそ知れくれやすきものを　其室

吹過ぬもさすがに秋の
風やそよぐ　夕日一条

ふるさとの
雁なきわたる　市八郎

夕ぬれ雲の
木がくれや雨清る　秋の月

てらされて
淋しき秋の
夜の月　素男

源氏
ひとつ屋の
隔てなりける　巴れ

ひとしと
涙ぞ
虚空なる
月　竜岸

[illegible]
加茂堤　変化

[illegible]
月の
[illegible]　入る　変化

見送るや嵐の中の笠の音　文生

秋と共に此夜一夜　吏花

名源

此辺の月もてやす秋　巻山

夜更て湖の月の夢　爰吏

菊の花や中の一夜　境遠　中村湖南

心なや捨て捨てふれの書　古屋武鳥

細々と古句美

ゆくえもなき旅や海山も春　東鳥

秋雁の来て鳴く境界　吏花

神の名も秋と結ぶの糸桜　悠歩

鳴り渡る陸奥の国の俳風の　波雄

我一と家出て月のかゝ事　北杜

藤倉の代世貢おくやう　卜史

名源

咲乱れ中ふ[illegible]糸桜　悠歩

撫子咲て見るゝ小雨もさゝぬ年　小社

幸あんの梅さくの蕎麦粉の餅　卜吏

旅人のさゝやきてゆくてゝる家　滝雄

細竹をたゝきて見てゝる　杜鵑　東鳥

鶏の子ふ鳴して小蕎麦　青東　岩水

金戸八百表

ちらつく雨遠千尺の自然瀑　里仙

忘嶺さゝれる蕎麦畑　麦花

山神供の名も蕎麦ゝ蕎麦ゝて　雨柳

さゝ〳〵〳〵柳江戸の雨　徒桃

小高巒ふ廿年の雨てゝ　柳京

白ゝ悟空の如りかちゝ　芳喜

松ゝ桜咲ゝて高ふ沈る月　霧也

夢ゝ見ゝ遠の滝ふ雨ゝ　金会

公孫

羅漢ふ尼の背柳ゝ　柳京

蔦雪の鶯　多しの雨柳
散しうつるの流れ岩の流れ　徒花
数咲や宮の門ちかきふるさと　尼芳雪
名所や宮ゆきを宮の行ゆく　英合
きりぎしの　おくるる虎ぜ　鬱中
ふ所ぜ　寒ぜ　里仙

蕪村六句表

海ゆかん北斗の長堤くゝる　鬱し

永日も使ふて深れり　支左
ちまの春の神の春よりて　欽友
ぬ足えぬ宮の家業　青柳
源氏蛍を惜ふ河流くゝ留之の月　青風
稚ふ子と遊ふ家の春　心青

太祇

あくの月振ふて又せる義法師　青風
夕ばふ宮の流れの田植小　青柳

ぬるゝ江の木魂か時鳥　歌友

おしやりに女中の顔あり日傘ハ　瓢乙

中ふ子のむしらぬハ絹草のむ　乙青

大井　經家江一折

こゝし呂塚の時むかし実あ信せ石の三州ふ經歴してちよふふ鄕しとあるは新しよふハ閑と縁んで秋くの社中を讀ミを徒ふふ誰擬しのふ更た明暁の首途を祝ふるふとゝろ良人好と旨くしのきふ嬉ふなまくの身非賢ふんとをあしまく

調和文園　石花翁

花て水々月影のぬるゝ流しふう

青本うらハ蘇の旅　麦花

おしつ緑薫てち種芋の脇ふして　和濤

背戸へ咲込む茎や嬉りか　里芳

ラ藤籠の月さしかる夕ミ芳　雁紐

祝詞ふ添くる粽衣の袖　春今

下戸の名も折ふぬれてハ几きかり　松亭

ゆるさをうしろ寿真津簾京　志白

霧おりてゆくと泊りし寒さ哉　如貞

またうしとうけ萩の帰り花　周布

緑のむすぶ人のあはれの夏断哉　秀悠

雨ふきて晴れて七家子る哉　三寿

冬部

鶏頭やわかりの草を踏く中　和濤

たとりくし山路出ぬれば呼子鳥　松茂

雨あがりし夕日照り添ふ庭の紅葉　女　如貞

舟かけて浦辺あり寄する　周布

里桜や居りし一人二人の如く　志石

法までに木の葉ぞ満ちて能キ　里芳

取合し如くも鶏や寒の雨　寿今

淋しさに寝て見し文暗く夜寒かな　三嶌

来ぬ人を待ちて二夜もすさまじき　戸紀

椎子やなどもはえ今年雨ある文　秀悠

桜くる葉にちる今宵後の霧時雨　花翁

中津川

自然ふかく入る日ふかし　人の優游も　随松園巴文

むかしこゝとかやあるらん　支丸

海苔の海髪や鹿尾菜を積置て　乎融

ありてのゆゑ　ものこゝ　子乙

苔の方ふ髪清の　ものの　少我

一ねう二ねう　ねう　順古

ふる雅神のくゝり　ゆゑ　庵生

あふ清さえ　釜らん物　巴鳴

ゆ紅葉ゝ　ぬゝ　文則

ゆ　て　小町の　柳南

ゆゝ　て　の　の　庵迷

くゝ　ゆ　ゆ　ゆ　其鈴

ふ祈　ふ　梨　ふ　文今

ゆ　て　雪　毎　ゆ　嘉柳

須も　湯も　ゆ　ゆ　ゆ　嘉龍

右縁おり一帙

名頃

巴文
字乙
文今
順古
左玉
巴形

文例
戈我
柳南
蒙姓
主彩
南柳
左逆
立融場

織の彩ふ織の糸ふる主ふ郡
紙ものを糸書よ廢て書れの彩
砂かうり〳〵く笠や書此日
ちり〳〵ふ雲主ふ年月晴
雲紙ものを〳〵ものを除主ふ
紙紙書を紙清ちふ此柳色
花ふんて書ふ絲色川雨結
糸ちふ〳〵や袋祥ちふ〳〵ふ

岩合八日表

京師清水石の清四代住わるとなて
きくこと稀と正く御餘の歌をと
ひし旦をこれハ住置ふ情あること
家ふ地名を探ることまふ浦りて住くる
あふ住五を初作る

しきしひ恋ん紙 岩合の川柳 猛房 素堂

住さ其祝りる 住こわ〳〵ふ 素堂
感意も意ふて 神の感とまして 梅子
あ 和〳〵ふ寸 ことし 文柳

細指ふ今ふ 住文の琴れも 宵考
就わ〳〵て 寸月 中南
雲ろ〳〵ち〳〵 咲く月 雲海
えへ就を丁 暗く寸る 房 蕨雄
名源
屑〳〵さまのさして〳〵ろ〳〵に傘ふ 梅子
刈ふれ寸を見ろ〳〵も 神籠 方考
夫夏ふ白ふ搭ふやを の雨 中南

秋さへやふまれありしくれくれ　文柳
ミかくしもきれし山路の時雨　重淳
むら消も麻布の跡々桜の実　蕪礎
遠川しくさ新ある雨に夜寒哉　素琮

菊本六白書

作場も蕗石の野田を只中に十伸ふ
座敷を新ふ住吉ありくらんさに
名残くをしむの住桜あふへんさか
これまくとありしかん達ふ彼居あれ
かくさ禄しまく

三蝶
天ありも諸川の千居の百千哉
春の海くくを来の千七夜　麦左
菜摘川に神子に謂を添りて　春花
情掛の香に氣をとめれ哉　文阜
おくらの月に新来へ如く移り　徳松
花の初川春の酒の盛を　湯波
名残
雨のはれ下桜に松小鉢に　徳松

すゝトホ桜のまふこゝろやゝ後の夏　文平
ゆ[illegible]恋も深めの[illegible]の桜ふ　陽坡
こゝ[illegible]ふ州の[illegible]こゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　三葉
きゝ[illegible]の[illegible]ふ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　春花

岩村

[illegible]の[illegible]ひふ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　和節坊

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]　変化
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　一指
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　二松
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　没平
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　一調
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　松儀
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　尊成
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　渓外

[illegible]　九月　晦日　七和
[illegible]　字曲
[illegible]　通菓
仕[illegible]　古漬
[illegible]　塩古
新[illegible]　素麺
[illegible]　和菓
右[illegible]一帖

名深

[illegible]　松徹
[illegible]　素麺
[illegible]　古漬
[illegible]　通菓
[illegible]　漬物
[illegible]　羊羹
夕立の[illegible]　一閑

みちる浦や波の寄わたし　生和
来る雨やむかしの宿落花哉　螢古
蔓草の垣にゆるむや秋の風　二松
鶯や路の続きに尽しかね　知草
残る日や夕顔の朝をも見せて　浅草
濁り水もかくし菖蒲の牡丹哉　字坐
移り香の梅にかゝる枕かな　一指
出渡て棹ゆるしその月　和郎坊

明知　綾家郎

東海の春雨しとしとふる路く寒西の空巴江らしく雲香園の作の前庭をて見しゆかしくて

暮る宮の君ならと東北　綾家
梨花園 作庵
屋も中和の二字と秋とも　文左
柳も物さく折る程家庭語なて　暖れ
秋の月とするにはなくる　茶乙
ら
うそさとさらしてそめ月の露　経哉

行ふ きまりとなる 第六 妹 義家

御て田舎の名あるを聞きれ 淀君

細めを 頒りて れの月毛の 和泉

咒詛屋敷のお使を深く秘密の 赤負

ものして 源 ひたすら叩く 仮想 河竜

梅もまさしく咲 雪 候の所かなる 桂川

さ原の 淀 ものを 毎 ものを 第二

ものをしたりしかのなる 一止

はは明しよりて叩くを 梅 主水

北 宮 さ 常 芝 と なる 日 の ま ま 里 姫

雖 百 食 も 叩 よ 梅 も 叩 く 梅 枝

お 常 ひ も 手 ふ 桂 む 神 の 桜 楽 京

之 宮 を 伸 ま 居 ひ ま ま 淀 客

吹 風 て 叩 ふ の 頭 の 月 華 里 英

裏 毛 の 弱 の 叩 む 嘗 言 ま 桂

ウ 里 利 の 安 宮 と 斗 る 和 田 恩 地 和 水

ちりぬと聞て駒をとゞめ北斗を
望やうふ雲をたゞの笠の雪より
ふまし山 苔 清 鶯の 音 鬱遠

太祇

夕 鶯 鳴 や 岩 ま ま 雲 の 峯 緑 葉
朝 ま も 鶯 う 時 や 清 る 布 屋
おもしろうて 鶯 鳴 ぬ 清 水 渓 蔭
蟹 重 や 金 新 も 乳 母 ふ ま 清 れ 和 泉

所望も 信 長 軍 盤 あり 梅 の 雪 菜 蕾
鶯 ひ ら ま の 緑 ひ う 雲 の 峯 和 れ
梅 ま り の 下 も 雪 あ り 川 深 ま 花
温 泉 の 山 北 も 北 ま ま て 橋 ふ 鶯 鼓
深 ま ま や 所 牛 雲 ふ 為 え る 峯 梅 ば
と 北 村 も 高 い 出 ま 雪 や 白 和 一 止
鶯 い ま く 金 雲 の ま 雲 ま 北 と 紅 葉
姫 ゆ り や ま る 月 橋 の ま ふ 折 れ 菜 乙

[illegible]　巻二
[illegible]　鬱遊
[illegible]　[illegible]
[illegible]　江亀
[illegible]　演雪
[illegible]　雪泉
[illegible]　雪月
[illegible]　梅枝

[illegible]　一日市場　雲渊
[illegible]　雲英
[illegible]　喫茶　媒礼
[illegible]　梓文
[illegible]　変化
[illegible]　指宣
[illegible]　文平

ウ 深氣なる月の丸鏡かゝるあり　市岸
霧を祈るよ　稲荷の明神　信流
深草とうとき社の清よみて　旭く
大の男かゝ[illegible]の影の粕　雪更
口ハまゝふまゝく雲路の侍九市　雪更
人目の冥ふまれて衡之　佳井
おこ[illegible]こ[illegible]も[illegible]の時ふ　顧左
雪ふんんの[illegible]ぬ永よ日　墨香

右孫
清軍てう[illegible]る[illegible]よ雲の雨　指宮坊
り秋ちきれ[illegible]の[illegible]子縄　市岸
[illegible]の却も[illegible]とゝ[illegible]ふ　墨香
ひふふ枝折ゝ[illegible]梅の京　文平
清ゝの[illegible]ふ[illegible]神北庭　雪更
蘭の京やはん[illegible]ふ越ふ縁り也　雲水
遠近の時と[illegible]る[illegible]の　佳流

雲雨や雪解もやまる林川　春更
風や屋根ふく一日鶯の音　旭之
雲のうち濃み晴るや空の雨　顔花
雲めこの移つ高ゆふ雲の姿ふ　杵更

表紙八百表

花くも咲せしら雲の蔵　墨象

遠化やうせのんせてうき　更花
俳諧姫の出名ふたい後あり　春白

又なくもあるふ和ゆるなし　青石
交りて二人ふ代のいんしられ　一軌
連れ浮おきふふるる味深　墨吉
春霞ふるれの美新ふ浮る　丹交
丁の蔵ひも今浮りしは　年蔵

六孫

ふるとれふ濃りてはの柳れ　一軌
月代ふこ多ひ月ふ　春白

伸るはて遥かに持ち柳　この毛　青石
四の緑をや乱れいでて出る木賀宿　里岳
夢うけて新たれば遠の雪の色　年蓑
柳ちらして月氣とうく桜小和　母貞
氣重や清り里の乱れ　里家

枝戸　六白表

見遥るや雲の色の乱れの張　一志
見たるいつ咲きたる雲　支左

注連うる柳の枝ハ煙(キリ)大かるやおよて　友雎
弦うるとかりの緑の田　逸笑
夢ふみる里の月の光勝まうて
人目の寒ふ袋流よ　を
久保
目ふ高く夢と月高う夢ふ袋　友雎
紫くや雪雲の芽ふ重て咲きく　逸笑
月伸ふ市や　柳の枝うるる　一志

岩上八句表

春の旅戸月の庵り此生作ん　芭蕉

二段の咲きも枝りも春　夏九

夕霧を神の流れ猶も霧きて　路通

岩り〳〵岩の美人谷の　岩雪

顧くしの玉底茂深雪月士　雪居

今宵八卦の死〳〵行　惣一

さ〳〵〳〵時雨れるの一去きり　梅故

末の松も深き信濃の里　化月

名残

咲りをみちゝやてゝ〳〵家々の春　路通

雨ふきも深き雪ぬ底茂深　梅故

鶯〳〵やむの月ふい別れ帰り　化月

月前て面く雪〳〵の裏　玉琴

山雲〳〵雲もちゝ世間雑子代夢　雪足

松ふ折り窓〳〵ぬ新や石の月　和水

紅葉ちる沖の雲あり　巡一

移きしや雪も吹きぬき縁側よ　謂今

月仲や水うしろ思ひなる　春柏

溪鶯わるくて遠ふや白月峰　呂雪

きるうちを降りて吹きる時雨　喜柏

市ゝ瀬縁の行一折

雪景色師走石の立枝を
むらくらい降りて和すて春吹
る嘶りて長きの飛を吹わんとき
きうさ前後と立つ寒の花川ふ
をわりとけりて

縁移る蔵ふ月ふ雨ゝ春　この郷　里嘗

さゝいとゝそる芝ふ吹まれ　麦九

ゆるやかふ長の甚北やえて　里柳

おゝ佐坂のゆるを深け　美紋

むけたゝ降る月の蛙姑　社別

ふれゝ蛙岩今北この手　流太

海茂中ふ法師樓二八走うゝ沢　松美

新んてえゝを五ゝ一口　け海

流れかゝりて白雲まとむ宿　沼峰

大川天しやゝく岩に　友校

うゝゝん高ふ深みてうゝも　顧三

まゝ〳〵ゝ見えまく粹　羊

久保

紫しやの松高ふ重なれ　杜洲

松小原の烟りまうふ高ふ　美紋

化粧滝もうみふ高ふ横ふれ　女　山海

出家ゝゝ幽ゝゝよりは　沼峰

まゝ風や高ふ吹ふ自ふ　流古

風高の奥那ふまゝ月　ずゝ　友校

降ふ戸や家百ふ露のかゝる　萩原　校羊

降ふ雪の淋しゝ新の軒ふ　顧三

山吹や雨ふまゝ美北海　里桃

多良八合表

東ゝゝのふ美ふ風格の上　和洲

柳ちるみたらくり言　支左
正東ふ神代の時をもて初まりて　四段
破れもしけるもしるしなり　笑れ
霧ふもしるふ情氣のこと　開系
緑りてもてるれふものよ子　作里
くもくもくもりて元の冥の月　指石
妙もくもくもる小男系も今　巴石
名源

草枕や旅ふをもむ酒の好　指石
関ちの業ふ村ふ火祭ふ　開系
秋もくもく煙もゆもゆ秋の京　四段
砂ふ文字祝ふ書捨ふ汐干深　笑れ
湯殿ふも元服ふ終月　作里
掛かりて乗古ひ川　青簾　巴石
菖水や東の蕪ふ時雨重　和国

他邦之部

折ふしも箱根越の旅程を見廻し
ころめしより東海道の駅路の
首途を見送り祝しまりて

松は東風山路は末に雑色よ
ん行くも来る日の旅　又左

摂州羽郷
連和坊

飛州下原

高原郷箕西越の旅途を見送り
参りて

雲も知る川風情ふかきや柳哉

素有

渉うつる名に紛し直樽　又左

佐保姫も登る文詠もすみわりて　起石

右三ッ物

信濃
福嶋武門

道流の宗師ハ老の臭廣なれとや
わんとなられさ山海を厭ハす宗西
さして旅を遊りてハ旅に紀行の
志懇さらすに宗匠ハ於も云とありそ
思ひきうら何ものしめ予かれハ嘆し
いさきよさ旅の途に入と祈れまそと
祝し奉くるし

配られよ濃き衣方の恋ぬ香に　公平住樓の月花子

永日ちらふ花の袂　支た

月

高砂なる尾の松甲を左の月論ふして
わらくハ紙屋のかつらを抜りんと行深
恋乱の袋ゆとつと高ふ一生を遠と祈て

待ひめられん方しく年の後　左柱

時正ハ今と来るる桜　支た

元禄の昔を源氏の雲ふ年くて　素菜

流るふしてを結ん愛し　文弦

も稲掛て春を　素碎

十九ハ元ドやあて唐廣　指月

神も春を月出う清の気光　徒原

行う度う　藤ふ　西亭　文弦

右八白表

名塚

万平の雪ん雲ふ嶮の岩　素碎

清の言葉より理めるよ雪の山　素堂

山吹や宮ぬ流れの落かこう　文雄

秋のりく詩ふ聚り浦ふ寄　指月

清きふ和とくこんえて雲の家　徳原

梅の花や美ふ仰ぎ香ぬ徳　文哉

又家人ふ下ニ稀ふ田植小　古花

尾張　名古屋

[illegible]国の[illegible]
[illegible]ふ祝ふを送る

雪しふ雲の前ふ途や梅と竹

神ふ詠ふ紙ふのゆはの

東武　下谷

雪ふ西つの梅咲ふ雪ふ香園の高師や
生愛浅きふの人和いまあうり水て雪ふ
世上の沈屋を新しふ雪ふ夕ふにの石屋
秋解て雪ふく海内の秋半と梅ふ竹
ふ[illegible]ふ雪ふ種化をそそ仰ふて秋ふ
詩ふ四海あふく夕ふ美ふ和ふも
ふりて秋の梅を庭ふ雪ふと春ふ

あらこゝし此集深恵の余感を摘り
出て坂も降石へ便因りよし去る
あくより我は穀語に望しよ脇留
の一句さ取り撰を実道の末葉に乞ひ此
を遂を崔踊して書来の趣に従し
なるのミ

笑嘯居
一先蓮

叶や来て咲くのよ頭陀に居の宿

造化任せの旅も此春　愛左

啼客や維摩に与川宿ねの巴て　偃吹

蕙さやうに雪の柳川　東甫

ちらして入れぬ此世の先ぬし　深守

此門を危も何れもあれて至　可運

月も下野に名残とありて殊さき　文考

きよらんてきめかさをと　吃松

ら

江蕉越ゆ毛見て首尾よく進り　杜壑

雨も木雨も又故のさ哉く　雲流

強り棲の中を嵐を拾ひあてて　湾二

潤布さへ孫を領りし紙　松亭

さのみなのみ沼にお湯をハ　実花
まうゐ　面雲　集雪
又嘯しうゝ二ゝ　雲雀　来志
ゝゝれ庵のめしを住ゝも　巨丈
月雪と法を学るも　ひれ　杜宏
次第ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　波光
氣ゝ利て　ゝ　ゝ　ゝ　花柱
鶯ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　安雄

又もちろん春りょう之方ゟ
たいてくメヤまる弓ゟ之紙　宮井
ひろ社ゟ之書　春ゟてり　保雪
ゟ本ゟ切ゟ也ゟ金長蔵　琴波
紙元ゟ之れくゟ　ゟ之ゟ一ッ矣　是国
をしゟ也ゟ　ゟん元　支ゟ
ろち濃ゟ法ゟて　ゟ之月の義　修也
州しゟは之ゟ　稲ゟ之ゟよ法く　まゟの
　　松ゟ

ゟん姫ゟ之ゟ之の年ゟ　ゟり　芳ゟ
ゟく琴ゟ　ゟん法ゟ也　保生
法ゟ塩ゟ金ゟ　ゟト　鄙　調和
むし法ゟ　ゟ法　一ゟん　五嶽
ゟ之ゟ　ゟ法ゟを　弾ゟ法ゟも　法作
相姫春ゟ　稚ゟん　松ゟの弓　孤琴
盤品の涙ゟ　ゟ法　文ゟ言之　冬里
ゟ法ゟん人ゟ　ゟれゟ　ゟ法法　稚西

時しらぬ雨降る月なれや　梨園
一条は立くに泉の白きく　紀古
うれしさをたとへ仲弓の清ひ宮　芝塢
まゐれの多き彩鑑　於水
ありまうてすゆよ宮ども今　蓮雨
今しらぬ恋うしあむあくう　夕雄
右五十韻

右源

孫のよ引て夕美波　傳吹
とうの水宮りに白や蕾の塔　杜岸
白菊や雪ふる門のなつかられ　文雪坊
おかりうん世をを先ちきくい　宗雪坊
月雲を立ちうをいはやききれ　梨園
源寺さや月雲門原月年の月　青比
毛嶋くや雲を刈ん美代屋　烟和
浦うよ此くうよ嶋やあはを　石嶋

杜鵑
を我
波元
東南
新古
之郷
松風
むり月

風形りよりかしら傾くを茅屋
雨雲や降と氣のはらめる梅雨籠
ーてあり帆を縮めてけりくてるる
ひとつ月雨を雨くを雨とあり時鳥
雲雀う糸みなるけやれ中
海ひとつをいくつかをふの月
ひとつーや夕ひとつ雨雲の中
秋風や碇くちはしる海の雲

牽牛とくるくるとつるる柳うれ
茅葺ちと取よはをる橋本ふ
うの雨やこうもりの羽伏り蝙
蝠とくるるを雨うる蛍雨
道堂の新作ものしちくるる
蛍ちくるるまるうるる雲の夜
ひぐや捲とうて松ふ咲
保昌ふ佐うひとをはるり

松平
孫雪
夏木
若竹
蛍
吟松
俳豊
集雨

[illegible]　原山
[illegible]　友く
[illegible]　手流
[illegible]　五嶽
[illegible]　猿丸
[illegible]　雪嶺
[illegible]　法華
[illegible]　孤雲
[illegible]

[illegible]　月見
[illegible]　文忠
[illegible]　源忠
[illegible]　[illegible]
[illegible]　東海道
[illegible]　小野村雪堂　井
[illegible]　[illegible]中
[illegible]　松川

小草や色付ふ家も春ゝと　土佐 浜田

山吹や手ふれて見る岩の間　、宗由

打よせる浪にちらぬや桜海苔　、翠枝

橋杭を越れば打て柳かな　、虎丈

ちる梅のかほり雲廣し春の宿　西紀藤代 薫

飛ける燕ひらりて白し山　、頂波

花よもの啼さよ鶯居る　米澤 吉夕

埋火や種を焼る燭の房　古越加井 九二

住よしの宮人の袖や市の菊　、蓮丹

家に添る一人をまかせて田かりかな　某 素蓮

近江　　醒ヶ井

醒井の三州より頭にのかれ
何うりんとりて泥吹むく
名をの流切いさしも田に代る
中に橋ある水際の花磨る
あらは備しあるは奥りて涼と
旅客を郭か不見に新しく

見送らん夕まふ涼もりし須磨　文彦

よしく橋に涼ん旅人　麦江

[illegible]造化の[illegible]へ　稀矣

右三ッ物

[illegible]

[illegible]を[illegible]て[illegible]丸ふ　稀矣

同　同友

六白表

[illegible]る[illegible]酒　姫表

[illegible]の[illegible]去　支丸

[illegible]の[illegible]て　言湖

[illegible]の[illegible]し　芦竜

[illegible]て[illegible]を　又永

[illegible]の[illegible]　芦

[illegible]ゆ[illegible]ふ　又永

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]　言湖

[illegible]の[illegible]の[illegible]　芦竜

[illegible]

[illegible]　　妙喜

[illegible]

[illegible]　　一

[illegible]　　夏花

[illegible]　　阿月

[illegible]　　素月

[illegible]　　孤雲

遠く[illegible]川の[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　孤雲

[illegible]　　阿月

[illegible]の[illegible]　　素月

[illegible]　　孤雲

[illegible]　　一

京

[illegible]　　天阿坊

[illegible]

花に来ぬ鴬の京へ　麦た

東京仲郎し紀

景物しの今歳に見京まうて花も咲の
装西行とて遣うて旅して

うかれ遊び出ずに行山の春の桜　肥後 虚今

桜にうかれ出来る旅　麦た

八歳子

嬉しさよ見よに花に桜　越後 茂丈

折りしまゝ旅も三月　麦た

景物の名歳と浮かれ旅に桜往来の
三月八日慈の桜と向入と往来の言葉
桜と旅は遠く高名を弥生と部かり
見ても宿を見て花の道を
目眉の影も往来の旅路を
まし花の道の浮草のよりを行きし

すゝ多に旅して折ふしと海山も　三河西尾蓬中 春明

桜をちりし比旅も舟にに　麦た

穂ふに来よ世界の和らいで　房々龍

三十一文字もとしぐれ　名録

遠江国引佐郡奥山村の孫姫　文左
さゝくれ流水　文筆
さゝくれ流水　左琴
説て　曰　一
嗚呼文明のうたあらう　東三
奇すべし紙の遠　合音
吹進む新うたの声を遠し　梅路
西風も近てうたうふを　東

右紙文行一冊
文孫

ゆるうたうたふ西の雲　寿左
為新や稚しの遠く吹来る　東三
見え遠く寺詣のく夏来る　文左
孫の子ふ稚子為て孫うふ　文筆
東ふ稚や　うたうたふ山茶　梅路
東も見ん吹く秋の月　左琴

稲佐乃や山まよふせ浪よせ　守一

早速もまよ綾くのろ百子鳥　合香

夕月や月雨ふ化粧ふよそもあり　古　小竹

夕立やぬれさ人まてほめて居　李明

ふ手も雨のひとりあらへし稲佐ろの丁云楼くふこそし此具宇郷聖経西の文稿あり手そ衣を給ふすち経しあらあけて在此品壇方付あると詠みし社中とも屋日知もまふ屑しら寄ふおゆへ住吉詣経の一際ならてこらん社盛の此ふ内さ者ん

小之飛あり し来語と給へさふ物ふまと紙出三ふ旅の個客まてもの詣次出染出迎行ら人維ふ君見紙の際経ふ

繋しまふもの旅路の筆用せん　周防徳山　其硎

扇し渡しこうちろう柳よ其　東花

文をよめふすき竈ふ角ふ出ふて　三ノ　立翫

縫ふ螻の里ふ秋けく　口　青逸

まり萩の花ふ深ふ月の影　口　士游

又もお櫻ふおちて芽　五十三　蔵士

山内いかの刹寺も僧ふ入
相ふ寺らん新ありりと
きくるらて屋られぬ苦う業飯後
うり新こと新ふ越念
彼ふ新ぬ相の節白も主ふ次
相新さきふ妖業妖きき
引寺の居附ひくと新りりふ
新い初くせときうう飯のきん

二月 恋川
紀陸 憲今
三ノ 可社
口 長帆
口 家年
来 天竹

ふふうい神のお寺ふ新ふ
池の清ふ寺の業ちりと
白ふふる鬱ふ雅面ふ寺と新り
育てふけ移を新ふ公主
お蕉い新る飯の常蕉月表
芋の酒ふ新ふう新ふて
家中之の流分う小行ふふ
寺一ふうふ細うもの孫

おもしろきこともなき世を
造化ゟ懸のおく　霊志

右題弐行

浪花送別

庚辰の春某の舎にとゝまりけるに雪香の主と張し波の浦の便りあり清みし岸の本懐をなす事のさまをうし出別れて雪の涯みな作り置きの仮の所を寄りて清き空の陽をなしおくりなり残りの一途のおくを別れて作るやうに書きよろしき人と道連れを祈りて

風かほる道る船も浪の音　ミノ中津川　立歌坊

柳縫て秋くらし旅　麦た

浪花の春も既に居留の庵にて難波の浦まで送りけるに三月も末となりて一体の名を記しむつまじく語りあひて難波の種をも尽しこゝろもちて難波の橋の形見とて別れてかへりける　[illegible]

ミノ中津川　尼逸

穂にまるん角ぐむ芦の出かれ

おれを折む難波津の春　麦た

雪香ふかくこもりしは玉家西北屋の梅と
玉海ふかくこもらくふかくふかくふか